
報告者名	山口未花子	被調査者生年	①未確認(男)
調査者名	山口未花子	被調査者属性	①新山浜行政区長(N-7・N-10話者①、N-8話者④)
補助調査者	なし		

被調査者(主な聞き書きは話者①から)

- *話者② 1948年(男)、牡鹿地区宮司(N-2・N-6話者、N-8・N-10話者②)
- *話者③ 生年未確認(男)、新山地区住民(氏子総代)

本報告は、特定の話者への聞き取りではなく、2012年10月27日、新山の火祭りへの参与観察記録である。

例祭の前夜祭(新山の火祭り)

新山では例祭の前夜祭として夕方ころになると八鳴神社の横で大きな焚火を焚く火祭りを行う。昨年度はたき火を行う場所が震災と台風でたガレキで埋もれて実施が出来なかったが、今年度はなんとか祭までに整備が整い、開催することが出来た。今年度は開催にはこぎつけたが、祭の規模は縮小した。区長さんも直前まで祭が行われるかどうか分からないと話していた。それは開催の場所が以前よりも狭くなったこともあるが、薪を用意する男手が足りなくなってきたという点も大きな理由であったという。今年はいつもの3分の1のサイズの薪をつくることになった。

お昼すぎ～

集落内

集落内では、男性が集落内の神社にのぼりをたてたり、火祭りのための薪を準備している。また、女性が集落の中に安置されている地蔵などの石像に帽子と前掛けを付け替え、水をかけていた。石像や石塔は10体あり、地蔵は女性の守り神であり、また山神様の像はお産の守り神であるため、新山地区にお嫁に来た女性は、半強制的に婦人会に入り、40歳になるまでこの信仰に帰依することが求められたという。しかし若い女性が減り、こうした習慣もそれほど強い拘束をもたなくなってきた。帽子や前掛けはこの祭りのために物資をやり繰りして新調したという。以前までのものは海水で洗われて劣化がひどかった。本来は祭の日には海の小石を拾ってきて地蔵や石碑の前、神社の鳥居のところに備える風習があるのだが、今日港へ行ってみたら地盤沈下の影響で拾える範囲で石が見当たらなかったため断念したという。

生活センター

氏子総代たちがセンターに集合し、祭の準備をする。神饌として、わかめ、白菜と大根、白米、梨、りんご、紅白餅、お神酒、塩を用意して、盛り付けをする。また、祈祷で使う榊を切りだしてくる人もいる。また、女性2人が台所で賄いの準備をし、総代にお刺身、魚のアラ汁、パイキング、ビール、日本酒などを出す。

祭の段どりというものは、大まかには決まっているが、大体火をおこす係、見守る係、榊をとってくる係、などそれぞれが自分の役割を知っていて、自動的に準備がととのうようになっている。「小さい集落だから自分たちのことは自分たちで決めてうごく」という。生活センターで総代たちが飲んでいいる間に、若者が薪に火をつける。こ

のころには宮司さんも到着しお札の用意をおこなっている。

夕方～

八鳴神社

祈祷の準備が整うと、総代たちが、お供えを各自持って神社へと降りていく。ここで祈祷を行う。たき火は一晩中燃えているというが、今年は規模が小さいため夜なかには火が消えるだろうという。祈祷は氏子総代と、数名の参加者で行われた。

祈祷が終わると、女性たちがお団子と菊の花を指した花瓶を携えて神社にやってきて、社殿のなかで飲み会が始まる。また、たき火に悪いところを当てて祓うと、回復するというので、たき火に人々があたりにやってくる。いつもは遠くからもこの火祭りにやってくるのだが、今年は少ないという。一番神社の近くに住んでいる総代の1人が、火が消えるまで見守る役目だといい、たき火の傍にずっと残って火を見守っていた。火は消えるまで待ち、わざわざ消すことはしないという。

薪としては本来松を使うといいのだが、今年は手に入れやすい杉にした。杉は皮がはがれおちるので本当はあまりよくない。また、薪の組み方が昔はあったが、今はただ並べるだけになっている。それは昔は今たき火を焚いている地面が砂地である個所がアスファルトだったからだという。震災の影響で、アスファルトが割れていたところを砂で埋めてならしたため、現在はただ並べて火を焚くようにした。



写真1 地蔵の前掛けを付ける女性



写真2 火祭りのための薪



写真3 火祭りの様子